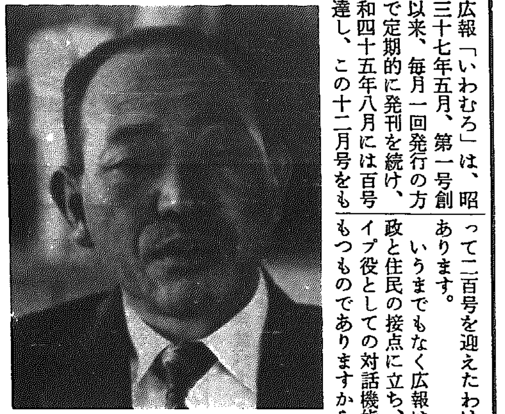
発行つづけて 200号

新たな気持で がんばります!!



広報「いわむろ」は、昭和三十七年五月、第一号創刊以来、毎月一回発行の方針で定期的に発刊を続け、昭和四十五年八月には百号に達し、この十二月号をもって二百号を迎えたわけであります。

いうまでもなく広報は行政と住民の接点に立ち、パイプ役としての対話機能をもつものでありますから、その内容は—親しみやすく、わかりやすい——ことが条件であり、村民的な話題から高度な行政施策まで幅広い内容を、あくまでもその編集基本の範囲でまとめ、工夫し提供するものでなければなりません。

二百号によせて

村長　金子誠一

このような観点から、氾濫する情報と、複雑化、高度化する行政機構のなかで、村民一人ひとりから村の行政施策を正しく理解してもらう情報源として、また、気軽な意見交流の場としての使命を再認識しつつ、この二百号を新たな「節目」として、更に充実した内容と見やすい広報として努力を傾注してまいりたいと考えております。

また、この記念すべき、二百号は歴代の編集子の努力の結果だけでなく、村民各位の温かいご理解、ご協力、とりわけ、配布の労をいただいております各区長さん方、目の不自由な方々のために毎月点訳奉仕を続けてくださっている弥彦村の荒川清さんなどの地道な蔭の力が結集し、なし得たものと衷心より感謝いたしております。

広報「いわむろ」は、これからも次の三百号をめざし、「人間味あふれる広報」を目標に発行を続けてまいりますが村民各位より折にふれ生の話題を提供くださるなどして、ともども力をあわせてよりすばらしい広報とするため一層のご鞭撻をお願いいたしごあいさつとします。

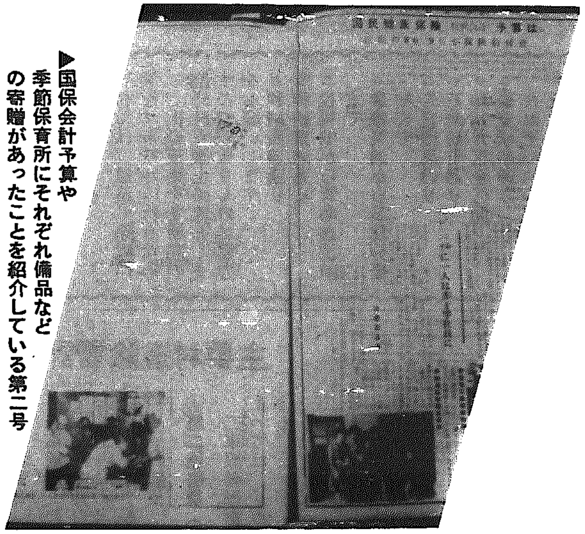
発刊200号を迎えて

みなさんの温かい励しをいただきながら、このたび広報「いわむろ」二百号をお届けすることができました。

広報は、村の〝顔〟であるといわれます。岩室村の〝顔〟としてふさわしい紙面づくりに毎号努力しているのですが、みなさんの評価はいかがでしょうか—。

この記念すべき二百号を機会にこれまで編集にたずさわってきた歴代担当者と読者の立場からの意見を寄せてもらい特集してみました。

—温故知新—　これらの意見を大切にして、よりすばらしい広報「いわむろ」にしたいと決意を新たにしています。



▶国保会計予算や季節保育所にそれぞれ備品などの寄贈があったことを紹介している第二号

足で取材し目で見る広報紙を！

初代担当者
現住民福祉課係長　**福田和雄**

広報「いわむろ」が発行されてから、本号で二百号を迎えた事を心からお喜び申しあげます。

広報「いわむろ」の発行は年数回、公民館から発行されていたものを、昭和三十七年五月から村の広報として「毎月発行」を目指して、役場の各課から一名の編集委員を置き、編集は公民館でやることになり、四月の異動で変ったばかりの私の担当となった。

第一号は小池課長さんからの指導で漸く出来たものの、二号からは私だけとなり編集に手間どり、夜の明けた事もあった。

今、当初の頃を振りかえって見た時、汗顔の思いがする。

時は過ぎ、新潟国体を迎え「花いっぱい運動」の推進に当り、三部公民館長（故人）から数回にわたり寄稿いただき、記事不足を補った事は幸いであった。

又、新潟国体の折、高松宮様が来村されて紙面を飾る事が出来た事など、思い出深い印象として残っている。

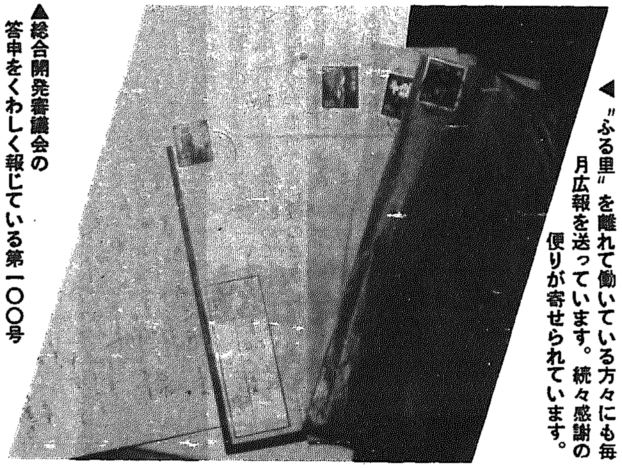
此の頃から村外への配布がなされるようになり、村の風物詩的なものをと思い原稿の〆切り間際まで写真の題材集めに走り回った事もあった。

発行から三年余りたち、今迄に使った写真を整理し「写真特集号」の発行を企画したが、予算難で中止となり残念でならなかった。

もともと、村の広報紙として発行しているのに、人手のない公民館で四苦八苦しながら発行する矛盾を強く感じつつ、編集のバトンを渡すことになった。

何はともあれ、二百号の発行を祝い、読む広報よりも、足で取材し、目で見る広報への発展を願望します。

▲総合開発審議会の答申をくわしく報じている第一〇〇号

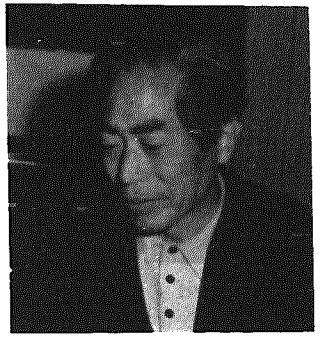


◀〝ふる里〟を離れて働いている方々にも毎月広報を送っています。続々感謝の便りが寄せられています。

弥彦村の荒川清さんは、民生委員などの要職をもつかたわら、広報「いわむろ」を毎月点訳奉仕を続けられている方です。

点訳という辛苦な仕事をコツコツと行っておられる荒川さんから、点訳を通してみた広報「いわむろ」の感想を寄せていただきました。

善意！とんでもありません、人と人とのふれあいですよ——と淡々と話す荒川さん、これからもよろしくお願いします。



弥彦村
荒川　清

私と広報「いわむろ」の出合いは、たしか、第一三二号からです。——目の不自由な方々のために、せめて身近な広報だけでも読んでもらいたい——そんな素朴な気持ちからこの点訳奉仕を始めることになったわけです。——記事の内容を正確に理解し忠実に訳さなければ——と常に心がけている関係で、広報「いわむろ」は毎号くまなく読ませていただいております。

私の広報「いわむろ」に対する所感、それは三つあります。

「記事の集め方に工夫がこらされている」「村民のねらうものを明確につかんでいる」「編集発行が誠実まじめであり、限られた枠の中に多方面の問題が要領よく記述されている」ことです。

しかし幅のある読者を対象にした広報の内容や形式は考えれば考えるほどむつかしいものです、村と村民を結ぶ最も重要な役割を持つパイプですから、今後も親しみやすく、読まれる広報紙づくりをめざし、その努力を続けてほしいと思います。

視覚障害者のため、私も微力ではありますがこれからもお役に立ちたいと考えております、ご理解をくださいまして、これからもよろしくお願いいたします。

大きく育て広報いわむろ

100号担当者
現住民福祉課長　**小池文夫**

季刊程度の公民館報では「事前に知らせる」というニュース性が発揮できないということで、毎月発行の広報いわむろとして生れかわったのが昭和三十七年五月。

そして第百号が昭和四十五年八月のことでした。

第一号の記事では、村の総予算が七千七百万円（今は約二十倍）と紹介され、田植賃金が三食付で五百円です。協定を守りましょうと呼びかけられていたり、第百号では、老人憩の家が岩室の玉木吉郎さんの名付親で「静閑荘」と決ったことなどが報ぜられ、第一号から完全に保存していたのは、金池の浅田五郎さん、和納五区の樋口ハルさん、間瀬六区の鶴巻トシノさんの三人だけであった、などの記事が印象深く思い出されます。

新聞紙の四分の一の大きさ、一段十二字詰め、七段組みという現在のスタイルは、公民館報時代に導入され、以来二十年以上引継がれ今日に至りました。

この間、編集担当は何人も交替していますが、共通して心がけたことは、読み易くて中味が濃く、村の人びとの暮しに役立つ広報をつくることでありました。

「読まれているだろうか？」という不安もまた共通のものでした。

今日、第二百号の節目を迎えて、わが広報「いわむろ」が、全国各地で活躍されている、岩室村出身の方々への「ふるさと便り」としても、ますます充実し、近い将来、月二回発行の本格的広報活動へと発展していくことを祈ってやみません。